（様　式）

令和5年度　学校評価書

学校名：　静岡市立大里中グループ（大里中　大里西小　中田小）

	大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から（小中一貫教育準備委員会等）	改善策（来年度の目標設定,具体的な取組目標）
静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動	【視点1】 学校の教育目標を グループ校で共有する	『学校教育目標『未来の創り手として、豊かに生き、社会で活躍できる子どもたち』を共有し、主体的で協働的な子どもを育成	①　(独自)さまざまな教育活動を通じて、主体性と協働性を高めることができる児童生徒の割合 （学校説明） 三校職員が、目指す子どもの姿を共有し、課題解決学習や個別最適な支援を意識することで、子どもが主体的・協働的に活躍できる場を設定してきた。行事や委員会活動等においても、子どもの「主体性」「協働性」を高められたと実感している。楽しく学校生活を送っていると回答した子どもや保護者の割合も90%以上と高い結果となった。6年生企画による150周年記念集会、体育委員会企画による150周年記念鬼ごっこなど子どもたちの思いを表現できる企画を実施していくことで、学校全体の雰囲気を高めることができた。	A	「主体性」「協働性」を3校が共有して取り組みの具体を実践したことはたいへん評価することができる。生徒会が主となり、3校であいさつデイを設けたことなど、地域にも発信できたことも1つの成果となろう。異動等で教職員の顔ぶれが変わっていこうとも、持続可能な取組を今後も期待したい。教育の根幹となる授業作りに「主体性」「協働性」を意識した実践も更に期待する。	引き続き、それぞれの行事や活動のねらいを明確にし、児童生徒の主体性や協働性を高めていく。その際に、企画の段階から児童生徒の出番を増やし、子どもの声から活動を創りあげる意識を高め、運営においても子どもが前面に出ることで達成感や充実感を味わわせたい。 　また、粘り強くやり抜く力、発信する力を育成するため、自ら課題を設定する機会、個人でとことん追究する時間、多様な人・ものと関わる場、発信の場を学校生活の中に複数設定し、より多くの子どもに達成感を味わわせていきたい。
	【視点2】 9年間の連続性、系統性を強化した教育課程を編成・実施する	進んであいさつができ、児童生徒が安全で安心して学校生活を送ることができる環境づくり	②　(独自)進んであいさつができ、安心して学校生活を送ることができる児童生徒の割合 （学校説明） 目標に「あいさつ」を取り入れ、日常的にあいさつの意識を高めるように取り組んだり、児童会・生徒会・委員会活動においてあいさつを呼び掛けたりすることで、進んであいさつするという児童生徒は80%を越しており、意識は高まっている。しかし、日常生活からの積極的・自主的なあいさつの取組には、意識がやや低いと言える。より一層あいさつの意識を高め、教員も率先して取り組むなどあいさつの環境を高めるように心掛けたい。	B	児童・生徒のあいさつする意識は高くなっているが、自主的にあいさつを言うことは、あまりできていないと感じる。学校・家庭・地域の活動を通してあいさつを交わし、人と関わることを大切にしてほしい。	・児童会・生徒会・委員会活動等での「あいさつ」の意識を高める取り組みを支える。 ・教員も率先してあいさつし、あいさつを意識した学校の環境づくりに取り組む。 ・学校だより・学年だより・学校のHP等を利用して、家庭や地域にもあいさつをかわす意識が高まるよう呼び掛けていく。
		9年間の系統性を意識し、3校共通研修テーマ「主体的・対話的で深い学びの創造」に向けた授業づくり	③　(独自)　初めの考えと比較し、終わりの考えが深まったと思う児童生徒の割合 （学校説明）主体的に学ぶ姿勢を育むため、児童生徒が自ら課題を設定、選択したり、学び方を選んだりとそれぞれの学校の実態に応じ手だてを打って授業に取り組んできた。アンケートを見ると、「年間を通して粘り強く学習に取り組むことができた」の問いに、そう思う、だいたいそう思うと答えた児童生徒は約8割で、自分の課題に向かい意欲的に学ぶ姿勢が育っていることがわかる。しかし、「対話を通し学びが深まった」の項目では、中学生で8割強、小学生で約7割と差が出た。児童には、協働的な学びの場を大切に位置付けていくと共に、「友達との関わりの中で学びが深まった姿の具体」を明確にして伝えていきたい。	B	各種アンケート及び発表会参加者の声から、主体的・対話的な授業の創造に向けた授業づくりが成されていることが見て取れる。特に総合的な学習の時間では、『大里型PBL』のもと授業実践がなされ、児童生徒も学びの喜びを持てたことは成果といえる。さらに、教科学習においても互いの関わりの中で深まる授業づくり(単元及び授業構想)に研鑽を積み重ねることができると確信している。	・次年度も各校で個の学びの充実を目指し、課題を設定したり学び方を選択したりして、主体的に学ぶ姿勢を育んでいく。また、対話の場も大切にし、個の学びと協働的な学びのバランスを考え、児童生徒同士が対話を通ながら学びを深める姿も求めていく。。 ・児童生徒に、「学びが深まった」具体の姿を伝えると共に、教師も具体的な姿を共有し、子どもたちが目指すものが明確になるようにしていく。 ・設問の言葉を、小学校低学年の児童にわかりやすいように検討していく。
		より良い学校づくりを目指し、児童生徒が進んで活動に取り組むような支援	④　(指標17)「人の役に立つ人間になりたいと思う」児童生徒の割合 （学校説明） 教師は、「主体は児童生徒」にあるという共通理解のもと、ファシリテーター役として児童生徒の合意形成、自己決定の場づくりを支援してきた。児童生徒は、「何のために行うのか」を意識し、「地域への発信」をテーマに掲げ、地域とともにあいさつ活動を実現させるなど、主体的に活動することができた。来年度も継続して児童生徒へ目的意識をもたせ、主体的な活動の場の支援をしていきたい。	A	授業参観でも児童生徒が自分たちで考えて行動する姿を見ることができた。 特にあいさつ運動では、学校・保護者・地域が一緒になって行なうことができて良かったと思う。	・「地域へ発信」をテーマに掲げ、あいさつ活動を中心に地域と関わる機会を増やす。 ・児童生徒の発想を生かした活動（三校や各校の活動）を支援する。 ・児童生徒が主体的に合意形成や自己決定ができるように、活動の場を支援する。
	【視点3】 教職員の協働、児童生徒の交流	上級生が下級生に信頼されるような取組を創造	⑤　(独自)上級生が下級生に信頼されるような交流ができていると実感する児童生徒の割合 （学校説明） 生徒会・児童会によるリモート会議を複数回行い、2度の「あいさつDAY」では、中学生が小学校を訪問してあいさつ活動を行うなど、児童生徒が直接関わる機会をもつことができた。また各校では、異学年交流を目的とした独自の活動を行い、下級生が上級生を目標に取り組む姿が見られるようになった。来年度は、決められた時間だけでなく、授業や生活の中でも、下級生と上級生が相互に意識できるような支援をしていきたい。	B	生徒会・児童会によるリモート会議、小中合同のあいさつ活動、各校での異学年交流を目的とした独自の活動などが、下級生が「りっぱな上級生になりたい」という意識をもたせていると思う。	・より下級生に信頼される上級生を目指す。 ・児童生徒が、決められた時間だけでなく、授業や生活の中でも下級生と上級生が相互に意識できるように活動を支援する。 ・児童生徒がICTを活用し、三校の取組を共有し合える場を支援する。 ・「あいさつday」をはじめ、小中合同での取組を複数回実施できるように支援する。
		子どもの姿を見合ったり、小中合同で組織研修をしたりするなど、9年間の系統性・連続性を意識した視点での研究	⑥　(指標23)「学年や校種の枠を越えて、連携を図っている」教職員の割合 （学校説明） 個別課題解決学習（PBL）や個別最適な支援（公正・公平な教育）に積極的に取り組むために、夏季研修会や授業参観など小中合同で研修会を行ってきた。また、プロジェクトごとに小中合同で目指す姿に向けてどのようなことができるのか話し合い、様々な実践を行ってきた。来年度は情報交換によって得た情報をより具体的な手立てに応用し、教科の学習等にも活用していきたい。	B	小中合同で様々な研修機会を通じて、教職員が積極的に研鑽に努めた結果が、大里型PBLの創造において大きな成果を上げている。働き方改革の観点からも職員の異動に影響されることのない持続可能な体制づくりに向けての更なる実践を期待する。	・小中ギャップを少なくし、児童・生徒が安心して生活できるよう、小中で同じテーマ「主体的・対話的で深い学びの創造」に向けて、9年間の成長段階に応じた指導をしていく。 ・各教科の学習で学年間の系統性を意識した指導を行うために、年間指導計画を作成し、共有できるようにしておく。
	【視点4】 地域との連携	学びを発揮深化するための地域や社会の物的、人的資源を有効的に取り入れた活動	⑦　(指標16)「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」児童生徒の割合 （学校説明） 総合的な学習を中心に地域の物的人的資源を活用した。直接話を伺うことで学習意欲が高まり、地域の課題を自分事としてとらえる子どもが増えたと考える。中学生では、地域に貢献したいと考えている生徒が学年が上がるにつれ、7割から9割へと上がっている。大里フェスティバルへの参加や地域住民とともにあいさつ運動を実施した。地域とともに活動する機会を増やすことで、より地域への関心を高めていきたい。	B	地域への関心が高まり、そこで見つけた課題の解消に自ら取り組み、地域も巻き込む素敵な活動になっている。協力者の声も聞きながら継続・発展していくことを期待し、又、私自身も一共に取り組みたいと考える。	・活用した地域人材を人材バンクとして記録し、情報を増やしていく。学校応援団とも連携し、地域の方々を中心とした新たな外部人材も積極的に活用していくことで、子どもたちが主体的に学習意欲の向上および新たな気づき・発見につながるようにしていきたい。 ・活動計画の段階でねらいを明確にすることで、適材適所で外部人材を取り入れていけるようにしていきたい。
	学校環境	教職員の意識改革	⑧　(独自)働き方改革を意識して、行事内容、会議などの見直しや精選をし、積極的に時間外勤務時間の軽減に努めている教職員の割合。 （学校説明） 積極的に時間外勤務時間の軽減に努めようと意識している職員が、小中全体で約半数おり（「そう思う17.2%、だいたい31.3%」）、優先順位を考慮した効率のよい仕事の進め方が少しずつ浸透してきている。一方で、学校行事等の精選や会議の持ち方の工夫など、児童生徒・保護者の理解を得ながら、更に業務内容の改善を図る必要があると考えている。	B	ひとりひとりの学びを認め、企画・実行・振り返りをしていくと決められた時間の中で計画的に進めていくことの大切さと難しさを感じるが、先生方の機敏な行動に働き方改革を頭において、資質向上にも取り組んでいる様子が見られる。	・日課を工夫し、教材研究や事務処理を行う時間を生み出す。 ・業務の優先順位を決め、定時退庁日を意識するよう職員に投げかける。 ・学校行事のあり方を見直し、業務改善を図る。
	グループ校の軸となる取組・活動		グループ校の評価指標	自己評価		
	児童・生徒の主体性・協働性を育むために、探究的な学び（PBL）に発展する授業を創造する。		⑨　(独自)課題を明確にし、探究的な学習に取り組むことができる児童生徒の割合 （学校説明） 9年間の発達段階に応じて、【主体性・課題設定力】【協働性】【情報活用力・発信力】の3観点ごとに育成したい資質能力を設定するとともに、学年ごとに大きなテーマを設けて探究学習を行った。子供たちは探究したい内容に応じて課題を設定してグループ活動を行った。仲間と協働しながら調査や発表するとともに、専門家に意見を求めるなど粘り強く学習を進めることができた。（児童生徒アンケートQ2-90%，Q8-82.3%）また、保護者アンケートで「児童生徒が設定した課題にたいして粘り強く取り組んでいる」に対して、そう思う・だいたいそう思うと回答した割合は68%であったため、子供たちが行っている探究学習をさらに地域にも広げていくことが課題の1つだとわかる。	B	主体性・協働性の基準がわからず、取組のゴール（合格点）が見えづらいため、基準があるのであれば明確にしてほしい。 　アンケートの文言にある「児童生徒が設定した課題」が何であるのか、課題内容を提示してほしい。	・外部機関との連携が充実することで、児童生徒の主体性の向上やより良い課題設定につながることが分かったので、外部機関とのつながりを広く継続するとともに、強化していきたい。 ・子供たちが主体的・協働的に学ぶ姿を保護者の方や地域の方に知ってもらうためにも、プレアクティビティやメインアクティビティの研究発表の際に、広く公開していきたい。

静岡型小中一貫教育における共通となる教育活動（全国調査等の活用）	学力の状況 （全国学力・学習状況調査）	小学校	（学校説明） ・国語、算数ともに、学校間で若干の差はあるが、全国平均率を上回っている。 国語では、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」、算数では「図形」の問題において、課題が見られた。 ・児童質問紙から、基本的な生活習慣が身についていること、自己肯定感が高いこと、いじめに対する意識が高いこと、自分で計画を立てて家庭学習に取り組んでいることなど、多くの項目で全国を上回っている。一方で、「将来の夢や目標をもっている」児童の割合が全国に比べると少し下回っていることが課題である。	小、中学校両校で国語や算数、数学のポイントが上がっている結果から自ら学ぼうとする姿を感じる。「個別最適な学び」や「公平・公正な教育」のもと、一人ひとりに寄り添った具体的な取り組みを継続する事で学校全体の底上げに繋がると考える。	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標） ・「主体的・対話的で深い学びの創造」を合同研修テーマとした授業改善を進める。 ・自己決定して進める個別最適な学びと対話を位置づけた協働的な学びの推進 ・ICTを積極的に活用した授業構想、AI型ドリル等の活用による基礎学力の定着。 ・大里型PBL学習を核にした資質能力の育成
		中学校	（学校説明） ・国語は、全国より＋4.2、県より＋3ポイント、数学は、全国より＋7.0、県より＋6ポイント。英語は、全国より＋6.4、県より＋5ポイントと、すべての項目において学力は上回っており、満足できる状況である。 ・学習に関する調査においても、「総合的な学習の時間では、自分の課題を立て、情報を集め整理し、調べたことを発表するなどの活動に取り組んだ」の項目において＋14.6ポイント上回るなど、多くの項目において良好である。			
	体力の状況 （新体力テスト、全国体力・運動能力、運動習慣調査）	小学校	（学校説明） ・全国平均を下回る項目が多かった。 ・各種目別に注目すると、男子では50m走、20mシャトルランを除く種目が全国平均を下回っている。また女子では、全種目で全国平均を下回っている。原因として新型コロナウイルス感染症による「運動時間の減少」「学習以外でのスクリーンタイムの増加」が挙げられる。 ・結果から体育・保健体育の授業以外での体力向上の取組を行っていく必要があると考える。	小学校も中学校も、全国平均を下回っている種目が多くあり、柔軟性、、敏捷性、跳躍力、持久力等様々な体力の低下が懸念される。ぜひ、体育・保健体育の授業以外での体力向上の取組みや、生涯にわたって運動していくことの大切さを理解させ、運動することが「楽しい」と思えるような授業づくの取り組みをしていただきたい。	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標） ・運動量を確保する意味でも、日常的かつ継続的に運動に取り組めるようにする。 →体つくり月間で持久走を行い、運動量の確保 　昼休み体育館の使用を割り振り、運動機会の確保 　体つくり月間に外遊びをしたくなる企画を体育委員会が主催する。 ・授業を通して、体を動かす・運動する事の楽しさを味わいながら、つけるべき力をバランス良く身につけられるようにする。 →ウォーミングアップで競技に関連する、様々な動きを取り入れる。
		中学校	（学校説明） 男子は立ち幅跳び、女子は持久走、50m、立ち幅跳びで全国平均を上回っていた。しかし、半数以上の種目で平均を下回っているため、今後の授業を通して体を動かすことの楽しさを味わいながら運動に取り組ませたい。運動する時間が授業時のみの生徒もいる中で、運動がどのように体に良い影響があるのか、また、生涯にわたって運動していくことの大切さを理解させるとともに、運動することが「楽しい」と思えるような授業づくりに取り組んでいきたいと感じる。			
	生徒指導の状況 （学校いじめ防止基本方針）		（学校説明） 年3回定期的に行う「悩み事アンケート」によって、悩みを抱えている児童生徒を早期に発見するように心がけている。加えて担任を中心として日常的に児童生徒の様子を観察することで、いじめ等の問題行動の早期発見・早期対応に努めている。また、いじめを中心とした問題行動が発覚した場合には、学年部・学年主任・生徒指導主任・管理職と情報を共有し、事実確認・相談・指導・委員会への連絡と組織的に対応するようにしている。「いじめ防止基本方針」を関係職員と周知徹底することでより円滑な対応につながるような体制の構築を目指したい。学校としてSST（ソーシャルスキルトレーニング）の授業を行ったり、よりよい人間関係づくりを念頭において指導したりしながら、児童生徒が安心安全な学校生活を送れるような環境づくりに取り組んでいるが、より一層その取り組みを進めていく。	いじめ問題の対応は、先生方の情報共有と共にいじめる側、受ける側の生徒、双方の家庭や交友関係、人格的特性等を考え、心理面・生活面のカウンセラーとの連携が必要です。安心・安全な環境づくりをお願いします。	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標） ・年3回の「悩み事アンケート」により、いじめ等の問題行動の早期発見・早期対応に心がける。 ・問題行動が発見された場合には、組織的な対応に心がけ、場合によってはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門家と連携して対応する。 ・担任による日常的な児童生徒の行動観察を粘り強く継続し、課題予防的生徒指導の立場に立ってSSTの授業の実践、より良い人間関係づくりへの取り組みをさらに進める。